

林若樹日記・大正三年（下）

牧野 和夫

三村竹清はその日記『不秋草堂日曆』昭和三年八月九日の条に次のように記している。

「八月九日 曇

朝 柳田へよりて順天堂へゆく 井上唾々といふ人へ宛手紙一束
求帰る 荷風 小波 湖山 春浪など遊び仲間之てかミ也唾々
たること久矣 唾々 名は精一 父は加州家之何かをして居た人
と見ゆ……」

〔「三村竹清日記 不秋草堂日曆（十九）」 早稲田大学坪内博士記念
演劇博物館『演劇研究』三十四号 平成二十三年三月。〕

また同日曆の昭和四年十一月十四日の条には

「十一月十四日 陰

朝 赴広田書店見葉書一束 角田浩々所受也 殆網羅当代文士
購之……」
ともある。

三村竹清が古書肆などから他人（その友人などに竹清の知友がいる

ことも多いが）の「一束」ほどの嵩の葉書・手紙類を購入していたことがわかる興味深い記述である。

竹清の手許に残った身辺の「あれこれ」は近年（二昨年あたりか）古書展などに一点物で即売（均一台などにも）、ないし入札会に一括もので出品されていたが、それらの中に竹清宛のものでもなく、親昵な交友関係に結ばれていたとも思われない人物に宛てた葉書・手紙類が少なからず見出され、入手してみても、紛れ込んだ経緯を考えあぐねていたのである。古書肆に入った後の混入ではないかとの疑念は、この日記の記述によって解消した。

竹清は「井上唾々といふ人へ」宛てた手紙一束を求めて帰っていたのである。ここに竹清求得旧蔵の井上唾々（精一）宛の一点（図版1）を紹介しておく。

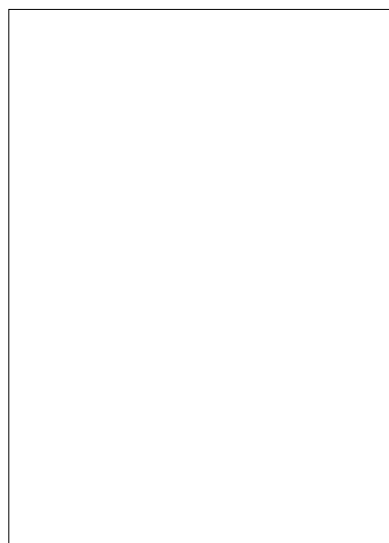
明治三十五年五月十二日（十三日）消印の唾々宛の押川春浪の葉書の表（宛名）である。井上唾々の父親如咆が加賀藩の前田公爵のそば近くに侍し、その邸内に唾々が生活していたこともわかる。裏面の文

中には「漢詩の一件荷風君と御相談の上どうか御願申します」とある。荷風宛の葉書は残念ながら手許にはない。唾々の別の一通には小波主催の「木曜会」の名も出てくる。木曜会には荷風は勿論、林若樹も出席し犬磨の号で出句しているのが、若樹にとって旧知のひとりではあるが、竹清にとつて井上精一は「唾々といふ人」であつたようである。昭和四年十一月四日広田書店より購入した一束は角田浩々歌客宛のもので、その内、「殆網羅当代文士」という風情をうかがうことのできる葉書一点のみを紹介しておく（図版2）。竹清旧知辱知の顔ぶれが田端に「集まつた」大正二年八月七日の「小集」会合の際の寄せ書きである。

この葉書はこんな風に見ていけばよいのではないか。例えば左上は「湖（内藤湖南）」（竹清の書入？）を「新海（竹太郎）」が画いたものと解すれば良いように考える。「湖南」も画いているが中央の「浩」とは角田本人か。田端白梅園に「小集」を催した中に角田も居たというケースを考えるべきであろう。各々漫画風に順繰りに会する人の顔を寄せ書きして、記念に各々が自宅へ送つたものか（こうした例は水鳥会などの集まりでも多いように思う）。

縷々「瑣事」についてつらねたが、竹清のこうした興味の持ち方には、明らかに同じ集古会の会員諸氏とくに林若樹などの「行き方」とは異なるものが認められるのである。竹清の昭和三・四年の「営み」を省み、改めて翻字を了えた若樹の日記帳を前にしての感想である。

いわでものことであるが、各葉書の表宛名左右欄外などに小字注記が認められる。図版1の右上には「春浪」と小字墨書がある。竹清の手である。若樹にはあまり見ない身辺の「営み」と思うのであるが、



図版 1



図版 2

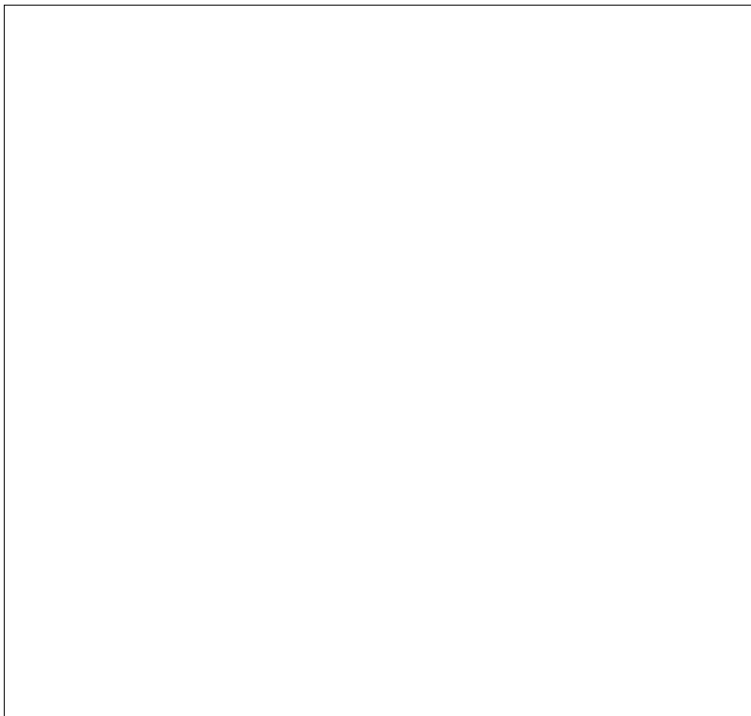
どうであろうか。

また、この日記帳には、二点の品がはさみ込まれている。

一点は、報状であり、もう一点は図書の予約申し込み用葉書である。ここにはさみ込まれた二点の資料について簡単な記述を附して紹介しておく。

餅の由来

本品の由来する處ただ遠く、延寶三年卯三月二十六日、弊舗の祖先兒島安兵衛盛次が、主家黒田又右衛門一久の事情ありて其家改易となる也、盛次は浪人となりたれば其兒彦一と共に町人と成り、現在の洲崎町に移り住みたるが、恰も福岡城東御門



前中島橋の往當りにて、渡世として餅屋を開業したれば世人誰云ふと無く『當り餅』と称したりき。時の城主黒田侯初めて賞翫せられしが、坊間ひさぐ處の餅と其選を異にせるより特に御用を仰せ付けられ、將軍家への献上、さては諸藩への進物として廣く御用を承はりしに、三代の城主光之公の御兄君松平越前守殿には命名をさへ賜はり、『當り餅』と云はんよりは寧ろ『博多餅』の名こそ相応しからんとて、弊舗の看板を直書にて賜はりたり。

斯くて明治五年、有栖川宮熾仁親王殿下には畏れ多くも福岡縣令として博多に在せられたる時親しく御用命仰せ賜はりしが、因らず前記弊舗の看板にお目を留めさせられ、其業者の何人なるかを御温ねの光榮に浴し、俱さに由来を言上し奉りたるに殊の外御賞詞遊ばされたり。されば東宮殿下及び有栖川威仁親王殿下の曾て福岡市假御所に御枉駕遊ばされたる時も謹んで献上仕り、其他博多の名士故平岡氏より小松宮妃殿下及び閑院宮妃殿下に献上仕りしに是又『風味佳良なり』との御賞味の趣き仄かに洩れ承はりぬ。

本品の特色は以上の光榮に依りて明かなるが、尚幾日を経過するも決して硬く成り、又は腐敗等の憂ひ更に無きは既に江湖の認むる處にて、日本赤十字社、福岡縣廳等の御用命を承はりあるは看板に偽りなく、時陽春の候に當りて大正博覽會の開設と共に續々御用命あらん事を、先は本品の由来まで報状左様。

大正三年三月

十八代目

兒島彦市謹白

（左欄外）

◎（大正博覧會第一會場園藝館前ニテ發賣仕候）

この報状は、本日記四月七日の頁にはさまっていたもので、「大正博覧會第一會場園藝館前ニテ發賣」されていた「博多名産 當り餅」のチラシで、ほぼ毎漢字ふりがな（すべて省略）付きで、薄紅梅色の一枚刷りである。一紙の寸法は、縦19.2×横26.6²裡で単枠内は13.9×21.9²裡である。元来は、

「四月卅日 木曜日 晴 集古会通知投函

午前十時統一を伴ひ兼ての約束なる博覧會に行く（姉の榮子等トラ／ホーム全治せざるに／付のこす）」

などの頁あたりにはさまれていたものかと思うが、詳細は不明。古書肆にてもまた入手後も、はさまれた名刺・チラシ・メモ類は若干移動しているようである。この日記帳にも数名の名刺がはさまっていた可能性があるが、現在は認められない。

大正博覧會に関する記述は次の通りである。

四月十一日の条に「本日は博覧會 皇太后陛下崩御發表に付一日丈休場、（諸興行／物並に賣店等／又同様）しかしさすがに人出はあり」

五月十三日の条に「夜幸田成友君を筭町に訪ふ途電車中より青山ノ博覧會第三会場を見る軍艦三笠「型」のイルミネーション見々たれと人出殆となく氣之毒の程なり」

六月六日の条にも「両兄ニ上野の博覧會を見せんとて新橋より電車十時上野下車第一会場内諸処を見めぐりたから亭本店にて昼食両兄何も喰せずパンのミを喰ふ朝鮮売店にて円座並冠傘、米上げざる、杓子

等を求む池ノ端にて榮子洋傘統一に刀とラッパを求め二時帰宅両兄共よくあるきたり」

など比較的豊富である。ひとつには、集古会の旧友の出品もあったようで、遡って二月十九日の条に竹清も係わる出品物について次の記述がある。

「二月十九日 木曜日

朝より雪となる午後止む夜又雪

午後津の川喜田久太夫君来る次て山中笑翁見ゆ晩

餐終りて三村君来る、

夜、歛無極会第四回なり、会するもの前記三君、橋田

素堂、田子泰三郎、長谷川美廣の諸氏、長谷川氏は竹

清君の旧友にして彫金家なり、今回の博覧會に竹清君の

図案になる筆筒を出品するに就て批評を乞はんか為」（26）

め田子氏同伴来会せる也、角形の（四分^半）杉と神鹿とを

配したる図也、」

とあり、彫金家長谷川美廣の出陳作品のデザインは竹清ということになる（紛らわしいことになりそうなので注記しておくが、「橋田素堂」と誤るのは牧野ではなく林若樹である。橋田素山の追悼号を『おいら』が組んでいるが、竹清とともに若樹も文章を寄せている。竹清の文章に比して「素堂」と誤るのも領けるものとなっているように思う）。

更に、

「三月廿日 晴 朝寒 午後より暖（年前六時博覧會開会の煙花／に目ざむ）」

年前九時過三村君來話暫時にして同氏宅より使にて博覧会出品人として参会すへき様云ひ来り衣服持参直ちに正装して上野に向はんとし
て辞去さる、」

ともあり、竹清の慌ただしい当日の様が目に浮かぶようである。

もう一点は、図書予約申し込み用の葉書である。この一点は、後半の記入なしの部分に無造作にはさみ込まれていたが、この葉書に係る記述は、いまのところ不明である。他の日記帳から移動したものかもしれないが、「大正四年 月 日」なので、おそらくこの日記帳のものである。予約出版ばやりのご時世、六月二十四日には、国宝堂佐竹某なるものが、アッシリア壁瓦集の予約依頼に現れているが、断っている。



ここに翻字紹介する日記は林若樹（本名若吉）の手になる大正三年の日記である。今回は前回と同じ手帳に記された大正三年六月一日から同年十二月二十三日にいたる部分である。

手帳の簡単な書誌事項を改めて記しておく。

表紙黒の皮（空押文）地に梨地布を貼る。（縦16.5×横10.0cm）。見返しはマーブル文様。後見返しに「表神保町」の「文房堂」のラベルを貼る。2頁の中央に「林若樹記」と鉛筆書。3頁左肩に「大正三年」と鉛筆書。眉上高さ約2.7cmで横界線を引き、下層は高さ14cm、有野12行半、1行の幅0.75cm。4頁から24頁は記入がなく、25頁から日記の本文始まるが63頁まで記入（3月20日まで）。64頁から70頁までは記入なく、新たに71頁（4月1日）から155頁（7月17日）まで記入。さらに156頁から252頁まで記入なく、253頁（12月16日）から258頁（12月23日）まで記入し、以下287頁（止）まで記入がない。林若樹自筆万年筆書きである。翻刻にあたっては次の要領にしたがった。

一、漢字は常用の字体を原則としたが、書名、人名などの固有名詞については原文どおりとした。

一、仮名遣いは原文のままとした。また、原文に見られる改行もそのままとした。

原文の句読点をそのまま生かした（原文においては、本来句点と思われる箇所にも読点を用いているが、それもそのままとした）。

一、誤字、脱字、衍字も原文どおりに翻刻し、適宜その傍らに（ママ）

を附した。ただし、（ ）でくくらない「ママ」やこれ以外の傍書は原文どおりである。

いたい（御教示を賜れば幸いです）。

字の抹消・墨減とその訂正（自筆での）については、本紀要55集（前集乞参照）の図（1）の如く二重傍線「||」を以て示し、下字の判明するものは「葦」（右傍「六」）のようにする。

一、判読不能の文字は□とした。その他、□は原文どおりである。

一、眉上などの書き込みについては、本紀要55集（前集乞参照）の図（2）の如く「眉上書込」として適当な箇所「」でくくって二字下げで示した。

一、小字双行は本紀要55集（前集乞参照）の図（3）の如くそのまま翻刻した。

一、挿入を示すと思われる小字・傍書については、適当な箇所に「」でくくって示した。

一、原本の各丁片面の終わりに当たるところに「」をつけ、その下に頁数を入れた。

一、挿絵・図・印などは、すべて図版として該当箇所に掲載した。

一、なお、本文中には、人権に関わる用語が認められる。資料的な性格を考えて原文のまま翻刻したが、人権問題の正しい理解の上に立って本文を活用されることを願いたい。

最後に本翻字は、いずれ影印（2013年時点では出版という形でと希望しているが）にて公開する予定であるが、暫くはこのような形で進めることをお断りしておく。従って、誤読・誤字・脱字や文字の大小、句点などの有無など不備が認められる点について、御寛恕を乞

* * *

六月一日 曇 時々雨

昨夜不熟眠 今朝六時博覧会デーの花火にて目さめて又ねむりかたし 不快」 127

午前 勝山岳陽子来話 両三日中ニ北京に帰るへしとトンコー発掘と称する西蔵文字。椽ノ紙片二葉並ニ支那産提籠一個を贈らる

午後飯睡不快漸く快復

夜校正

六月二日 雨 火

昨夜熟睡せず 午前九時 和久正辰氏之厚意にて高等

工業の切符を送附せられたれば蔵前の同校に赴きて

展観参観人陸続たり予の注目を惹きたるもの製版

科、応用化学科「窯業科」等 されど設備万般並ニ製作品共に貧弱

の観あり 各科にて其作品を売る 香水香油（香油）水おしろい、

セル地、浴衣地等買入れ校内にて寿司をもて昼食二代へ」 128

一時退出、高砂町の道具屋ニ寛永の年号ある聖堂の鳥居

を切りたる火鉢ある由先日本ノ内氏より聞きしをもて人形町ニ

下車して夫れを見る色は鉄色をなし一個ニハ葵の御紋一

個には享保の年号打出しあり何となくなつかしから

ぬもの故値も聞かすして過ぐ又乗車、三菱銀行ニ立寄り

り二時半帰宅 雨盛んにふり出たり、

つかれたれば暫時飯睡、夕入浴

夜校正、蔵書印譜一十六枚

六月四日（上書「三」）日 曇 水曜日

昨夜又不熟眠 午後 飯睡 夕迄庭掃除

夕食後 四谷本村ニ勝山氏を訪ふ移転先不明にて空しく

帰宅 午後菓子トラホーム手術」 129

暴風の警戒あり終日南風雲行あやし夜二入りて
疾風屋（疾風）を憶す

六月四日 木曜日 曇 薄暑

今晩四時烈風中警鐘に驚かされ屋上に出て四方を展望すれども火煙見えす又褥に入る 晏起 午前勝山氏より使来る金を

〔次行下方に〕「払ふ」

正午 伊地知季珍氏夫妻見ゆ

今日は公木社等へ行く筈なりしか心地あしめて見合はず

夜山中笑翁来話 元明帝陵碑の事、拓擧の法は天明時代

古義家より出てしなるへしとの咄、噴奏の紋のつきし器物に

近來の偽造物ある咄等

頃日夕方なと蚊多し、朝兒芽を出す

六月五日 金曜日 晴 暑」 130

夜來の雨霽る

午前十一時博物館二行く三宅博士に拙蔵幸太夫露文雜記

一冊を貸與する約あると、昨夜山笑翁之咄に歴史部に売物

に來り居る出羽庄内の天保十一年移封騒動の際の画帖三冊を

見ん為め也、三宅博士今日ハ出勤せず和田千吉君ニ雜記を預け置

く、画帖を見る素人画にして当時の様は□（「窺」カ）かふ二足れと感賞品

ニハあらず且つ鶴岡内一部の記録と見ゆ画帖の外ニ其組中

の血判誓約帳一冊並ニ其騒動の際の幟一枚あり、

此騒動の事ハ予か外高祖父佐藤藤佐翁に關係ある事件

にして即ち母の祖父の祖父の父也 移封の事止みたるも藤佐翁の

動の嫌疑にて「江戸」町奉行所ニ呼はれし際時の奉行矢部駿河守の面前

にて移封の非なることを述へしに其理あるにより矢部侯其口書」 131

を携へ閣議の際それを読み上げし為めとさへ伝へ居れり此画帖安

價ならはと思ひしか百円といふに手も出でず

此帖の中にて面白きは雖も百姓不仕二君の幟あると移封の事

止みたる際鶴岡の市の祝賀の接待所の軒、柱等杉の葉にて

包みたる事等

同所にて高橋健自氏の机上にて古瓦片数個を見るに奈良時代らしくもあり桃山くさくもある瓦なり陸奥の 出土のものにして最北のものなり、恐らくシカマの柵の遺跡ならんといふ、こゝにハ瓢

形の古墳もあり埴輪も出たりといふ、高橋君曰東に曳ゆる冊本大和民族の「東」北部柘植も史に見ゆることき簡単なるものはあらで意外に辺疆に及ぼし居るならん云々

一時半辞去池ノ端にて牛乳ニパンを食し文行堂に寄る主人不 132

在練堀町に中川得樓翁を訪ひ先般借用の「親」朋友字号一冊返却翁今春の病氣以来頗る衰弱せられし様見受く翁曰く頃日は

遠路は出来ず云々浅野梅堂の随筆聴輿（本）借用、

同筆欣然接之録といふ見聞並所蔵の書画等の臨書一冊を見る、

神保町にて

（7行空白） 133

（白紙） 134

神保町にて夏帽子を購ひ公木社に立寄り六時半帰宅上野

より徒歩久しふりの運動つかれたり直ちに入浴晚餐、うまし

伊勢松坂長谷川可内氏へ集古会出品物返却先月末大伝馬町の店に出せしに受取らぬ為め又々改めて返却せし也、

紅色鶏頭の苗をきめ花壇に植ゆ

六月六日 土曜日 晴 暑

伊地知、家族朝九時十五分新橋発にて横須賀に立つを見送る榮子、

統一両児引きつれ行く、喜太郎叔、坂川夫妻、赤松範一君妻等見ゆ

発車前神戸よりの汽車にて小嶋精太郎氏の上京し来るに会ふ、

発車見送り両児ニ上野の博覧会を見せんとて新橋より電車十

時上野下車第一会場内諸処を見めぐりたから亭本店にて昼

食両児何も喰せずパンのミを喰ふ朝鮮売店にて円座並冠傘、

米上げざる、杓子等を求む池ノ端にて榮子洋傘統一に 135

刀とラッパを求め二時帰宅両児共よくあるきたり

夕撒水、

六月七日 日曜日 晴

午前十時過宮沢朱明氏来話人形「二品」会ノ画譜出版に就ての相談也

両三日内ニ西沢仙湖氏の遺骨を高野山に納めん為め臨遺族「七」共に其途に上るへしと

午後二時辞去

夕食後両児を伴ひ久しふりにて原宿の三村君を訪ふ主人未帰宅せ

す令閨、令息ニあひ八時帰宅電車内より青山ノ第三会場ノ軍

艦のイルミネーション見えて両児よろこぶ並に伝馬町ノ仁丹の赤青

黄に交る広告等

六月八日 月曜日 晴 暑 八十度に上る

昨夜不眠終日閉居

夕入浴、読書

六月九日 火曜日 晴 136

（1行空白）

夕食後両児を伴ひ東大久保に山中翁を訪ひ朝鮮の杓子並

スクキザルを贈る久右エ門坂上より電車にて今回開通せし新線

路を新宿に出塩町下車八時帰宅

夜うつしもの

六月十日 水曜日 晴

てい子と下婢みきとを博覧会にやる両児と留守番 植木や

来り手入れ正午赤松範一君来訪一昨々七日之晩九州より帰京

と 植木屋と共に掃除、朝兒の垣をつくる、

夕てい子等帰宅 夜うつしもの十一時過就寝

日蘭協会より人來り日蘭関係物出品の勧誘あり 137

六月十一日 木曜日

（1行空白）

午後公木社に行かんと思ふ折、小林文七氏幸田君紹介之名刺持参にて

来訪同氏編纂中の浮世絵師著作二就て署名ある絵本等見たしといふ程に見せる、夕辞去

六月十二日 金曜日

今朝より夜にかけ下行四回 臥褥 夕半身浴

(1行空白)

六月十三日 土曜日 曇

小林文七氏より 某を遺して予の蔵書一見を望む病臥中二付 黒本合冊四十四冊を貸與す、

下痢未止まず但気分ハ替らず夕並就寝前入浴発汗、

浮世絵の下絵並板下を整理して仙花紙二貼り始む」 138

(2行空白)

六月十四日 日曜日 晴 薄暑

今晩豪雨並三雷鳴 朝齋る、下痢止まる

今日も平臥 夕より夜ニかけ浮世絵下絵整理、

松坂長谷川氏より先月中貸與せし玉晁筆餅菓子集一冊

返へる 蚊二三出づ

六月十五日 月曜日 晴 風あり

朝昼パン、夜、粥を食す 昨夜

午後より夜にかけ下絵整理、

今晩二時頃目ざめてねむれず綾足のすゝみ草説了流石に文章は手に入りしものなりと感ず暁三時半鳥鳴き四時

十分雀さえづり始む一ヶ月程前二ハ四時廿分なりき」 139

今日公木社の連中と行徳辺遠足の約ありしか病氣之為め果

さす残念

夜十時過、「八畳ノ」兩戸を閉さんとせしに終りの一枚二蟻の各々卵を

くわへたるか棧にむらかりうこめくを尽く取り捨つ大雨ニても

来らん徴か

六月十六日 火曜日 雨

閉居下絵整理

(1行空白)

夜野中完一氏来訪先年貸與せし支那綿紙を返却さる、

六月十七日 水曜日 雨

閉居 下絵整理

(2行空白) 140

六月十八日 木曜日 曇

午後久しふりにて外出文行堂より公木社に立より五時半 帰宅

夜、下絵整理

六月十九日 金曜日 曇

閉居 昨夜不熟眠今晩三時半二めざむ、雀の鳴きはしめ 四時十分なり 午前仮睡、今日ハなにもなす気なし

日本風俗図絵第一輯来る黒川真道氏の編にして同文館の出

板なりこれは先般同氏より其下相談ありて採録ノ書に就て選

定ニ預りしなり美濃本百枚 脚寫筆和四百枚 同筆水繪尺、予約價

二円は廉といふへし

公木社より貰ひ来りし鳥谷幡山氏の支那周遊図録を読む「日本」画家

としては一寸毛色ハ変り居るならんか一牀の観察平凡なり」 141

六月廿日 土曜日 曇

午前

(2行空白)

六月廿一日 日曜日 曇

午前三村竹清君久しふりにて来話 午後和田千吉君来る尋て同君之紹介にて杉山 氏来訪杉山氏

は美術学校図案科卒業生玩具の本を出版したしとて其相談

なり夜八時過両君辞去

和田君筑後彦羽郡糸井村「字若宮」若宮八幡所出之ウソ十個持来

(1行空白)

六月廿二日 月曜日 曇

今年は順当の梅雨といふことにて毎日鬱陶しき天候なり
昨夜不熟眠終日ゴロく

黒田月洞軒自筆詠集大團を読む、

朝公木社ノ遠藤廉治氏蔵書印譜印刷「用紙」ニ就て来訪

文行堂より「依頼し置きたる」仙花一束六枚届け来る

六月廿三日 火曜日 霽 暑

終日閉居先月ノ歎無極会出品物をうつす

（一行空白）

六月廿四日 水曜日 晴 酷暑 八十五度ニ至る

午前十時黒川真道氏風俗図絵刊行ニ就ての書籍等相

談午食を饗す午後一時過辞去、浮世絵師著作表三冊写、

野郎糞張草、明和黒本新文字絵つくし等貸與、

次で赤松範一君来話々々中京都之芸草堂主人清水晴風

翁のうなみの友統刊ニ就て相談ニ来るあまり編纂容易の

様ニ考へ居る様子故一ト先断る、範一君去つて後、日蘭協会

河井某氏来話和蘭ニ関係ある物品ノ撮影を乞ふ来廿七日

来るべく約す、次で又、宮沢朱明氏ノ紹介ニて國宝堂佐竹某

来るアツシリヤノ壁瓦集予約ニ就てなり、ことわる

夜座敷かたつけもの

今晚二時新宿角答出火廿数軒焼く警鐘頻りニて為め

ニねられず服薬四時より眠り九時起床ねむし、

六月廿五日 木曜日 曇

午前十時今明両日開催之古書籍展覧会を向両國美術俱

楽部に観る、竹清君に遇ふ、予の所得、文久三年ホフマン刊行之

大學（レザンにて出版）一冊、柳川春三手稿洋學指掌一冊、蝦夷往

来、等其他数種、遺憾なりしハ吉田吉五郎の店に打物評判記

といへる明和板ノ「刀」鍛冶の評判記青山堂米本一冊ありしを

三円五十銭なれば如何せんと数問往き過て後立かへりしか最早

人にさらわれしことなり午後二時帰宅

夜 歎無極会第八回、加賀翠溪、山中笑、貫井銀次郎、

和田千吉、木内愚之五氏参集 加賀氏の京傳所持の巴山人

の銅印は兼て糸印ならんと推測せしか果して龍頭紐の糸印

なりき

夜十時散会

六月廿六日 金曜日 雨

終日昨夜之出品物写生、

（一行空白）

六月廿七日 土曜日 曇 暑

写生略終了

夜竹清君を訪ひ六社蔵鏡譜之題簽揮毫を乞ニ持参座に

木村表具師あり、閑談十時ニ至る、板坂、堀ノ内鶴堂氏より

予に贈られし安守殿村篠斎詠草一葉宣長詠宣長の文政

年のの題詠課題書一葉を渡さる、

三村君昨月入手の宣長詠集自筆二冊、安守詠草一冊、

馬琴長文尺牘一通總編み、等過眼、馬琴尺牘の末に

代筆の困難等を記述せり並此書等は天保の改革に就ての絵

草紙問屋等の恐惶の状を叙述しありて面白し

木村氏と同時に辞去電車迄同行近日来るべく約して別れ十一時

前帰宅 竹清君刀、若樹清玩ノ石印出来落手

六月廿八日 日曜日 晴 八十五度

今朝来社せられたき旨公木社より通知ありて出社蔵書

印譜之印刷指揮午餐を喫して後小石川林町ニ和田千吉

君を訪ひうりもの、古瓦を見る見るへきものなし昨年の九州

旅行談など聞き四時過帰宅今日晴れて暑く流汗淋漓

夜、楊州十日記読了、戦乱之惨害二栗然たり、

六月廿九日 月曜日 晴 今日も八十五度

午前七時半三村竹清君六社蔵鏡譜「題簽」執筆出来持参雅談、

日清戦役ノ際一軍曹支那婦人よりかたみに空気枕に息を吹き

込みもらひて帰朝之後纏綿之状に堪へず其息を嚔きしに

ニラ臭きに百年の恋もさめ果たりたりとの談(マ)二一噓

文行堂二同行蔵書印「一匣」受取吉田書舗ニ立より和泉町にて別

れ三番町にて斬髪、午後二時帰宅流汗背をうるほす

夕入浴 昨日小嶋精太郎君所贈之印度玩具牛車 象 人物

届く(角谷叩きよ子携帶兩三日前順天堂へ入院) 147

来月分之蘭賦評論説了、

六月三十日 火曜日

在宅

(3行空白)

〔眉上書込〕「七月」朔日 水曜日 晴

今日も晴れて暑し 八十五度

(1行空白)

夜三村君訪問蔵書印ノ一部受取十時半帰宅

七月二日 木曜日 晴 八十八度

酷暑堪えかたし 148

終日在宅

夜木村表具師「初めて」来話 ハリバコと称さる紙十束持参

一東九十六枚 金十五錢
張込船ノ用紙ニせんとて也

(1行空白)

七月三日 金曜日 晴 九十度

昨夜酷暑の為め熟眠せず今朝晏起

暑き為め終日ゴロ／＼なす

七月四日 土曜日 晴 南風 酷暑 九十度

(1行空白)

夕入浴 夜月よし

七月五日 日曜日 陰晴不定九十度 午後少雨直ニ晴る

朝より下婢を相手に土蔵階下ノ大掃除夕六時過終了 149

つかれたり 食後入浴 夕より曇る

夜蔵書印譜等校正

日本風俗図絵刊行会より黒川氏より通知ありしとて今後毎号

寄贈之由申来り会費一ヶ月分並入会金共四円「小為替ニて」返却し来る

直ちニ受取並黒川氏へ挨拶之はかき出す

雅之助君へ九日董叔速夜出席之旨返書、

頃日月見草盛り今夕瓢箪初めて花さく、

七月六日 月曜日 九十度

終日南風砂塵を飛ばす

在宅

(1行空白)

七月七日 月曜日 涼 150

昨夜雨今朝霽れ夕より雨

本日大掃除春季施行の分延ひて今日ニ及びしなり先きに

耳ニしたるは大掃除は鼠族を駆逐し却て鼠疫を蔓(マ)するの

虞あるにより、牛込区は今期に限り執行せすと然るに又此夏期に

及びて零行す人民之迷惑思ふへし

手伝植木屋二人来る、夕五時終了

午後岡田未亡人、山中笑翁来訪 夜蔵書印譜校正

七月八日 水曜日 曇 涼、冷に近し

気分わるし終日臥床

夜蔵書印譜校正

七月九日 木曜日

林董叔一周忌速夜築地精養軒ニ招待出席 151

(2行空白)

七月十日 金曜日

午前八時芝青松寺ニ董叔の一周忌法要ニ列し去て青山

墓地に掃苔 帰途梅田潔君と同行同君の四谷愛住町の

宅ニ立より細君二面会正午帰宅

(2行空白)

七月十一日
 (2行空白)
 七月十二日
 (1行空白) 152
 (2行空白)
 七月十三日
 (2行空白)
 七月十四日
 (3行空白)
 七月十五日
 上野発一番にて赤松範一君並公木社々員遠藤、 両氏
 とにて日光見物二行十時過日光着細雨となる」 153
 町にて昼食 東照宮々司和地氏を訪ひて後神殿各所拝観
 陽明門を出る比より頭痛嘔吐の気味あり社務所にて静養
 三時予ハこゝに止まることニ決し三人は雨を冒して湯本ニ向ふ
 予は和地宮司の宅にて静養 夜漸く気分恢復、
 主人と談話十時就寝
 七月十六日 晴
 昨夜和地宮司方ニ厄介となる午前主人と談話
 午後昨日見残したる輪王寺詣 二荒社、三代將軍廟等見
 巡りて帰宅
 午後四時赤松君中禪寺湖畔より帰へり来る今朝湯本出
 立とのこと直ニ宮司方辞去、町にて土産物と、のへタ
 の汽車にて夜十時過帰宅」 154
 七月十七日
 日光の土産物のロクク細工の茶道具、両見大ニ悦ぶ
 (11行空白) 155
 (白紙) 156
 十二月十六日 晴 暖

暖和、春のことし、午後栄子ハ風邪未快からねは統一のみを
 つれて散歩に出つ統一大ニ悦ぶ電車にて文行堂ニ向ふ行く
 車中にてこゝは佐々木の於兄^一チャマ(千佐々木) 巾へ行くのりかへなり(後田橋)
 「など思ひ出して悦ぶ」こゝは順天堂なりなど教ゆれば帰へつたら於かあさまに教へて上げま
 せう
 〓せう
 など大元氣なり文行堂より、中川得楼老人の頃日切り二人を恋しかり
 居る由聞きて練堀町ニ同翁を訪ひ暫時談話、床ノ間に井上竹逸の
 山水幅か、れり竹逸の逸話など聞く統一傍ニチヨコナンと座し折
 〓菓子^二を頂き茶をす、りて待つ談話廿分程にて辞去、万世橋外迄
 徒歩同処より乗車駿河台下ニ下車神保町通りの歳暮の売出
 等を見つ、本屋などひやかし九段下ニてランドセルを買[〓]人榮子ニ公
 木社に立より坂下より乗車塩町下車すれば既に薄暮燈」 157
 光つく、広告燈の青紅色など悦ぶランドセル大に氣ニ入りて手を
 放さず五時過帰宅
 (1行空白)
 十二月十七日
 栄子病院に行く風邪未快からねはなり
 (3行空白)
 十二月十八日
 午後幸田成友君来語両見出て遊ぶ統一しきりニ同君とふざける
 何かいわれると馬鹿！馬鹿！といふ幸田さんは学校の先生で今に
 教はる様ニなるなりといへは眼を丸くしてびつくりして他の学校へ行く」
 からイ、ヨ支那の遠くの学校へ行くからイ、よ恭といふ大元氣なり
 幸田君夜十時辞去、
 (1行空白)
 十二月十九日
 統一風邪の気味ニ付姉の栄子と共に女医学校ニやる少々重き風邪
 なりと、八〓度六分、
 午前十時公木社に赴き歳書印譜のあまり紙受取、神保町にて同書

に挿入すへき半紙半々を求め神保町池上製本所に持参、同処、南明倶楽部二開ける浮世絵展覧会を観る、幸田君、朝倉無声子等に会ふ、帰途九段下岡野菓子舗にて菓子を仕入れ夕帰宅、

夜飲無極会十四回 貫井、三村、山中、木村、和久、諸氏来会」 159

木村君より蜜柑をもらふ統一イ、経師屋さんだネエとて褥中にてよろこぶ
(1行空白)

十二月廿日 統一容林同し熱度も朝夕廿八度五分二上る

午後文行堂に赴き帰途、播磨屋にて俚言集覧を求めてかへる看町下車、小沢薬店にて吸入用アルコール、並二統一たのみてみかん玉を求め薄暮帰宅 統一食気なしみかん玉も一寸口にして直二よす

(2行空白)

十二月廿一日

午後蔵書印譜製本のこと二付公木杜より池上製本所二廻り帰途又

公木杜二よる、遠藤君二小児風邪のことをはなす、同君ハ先年長女をチ叩フテリヤにて殆と奪はれし事ありて、切り二能い医師二かゝるべきことをいふ、統一の風邪も何となく心配になりし故帰途、飯田町五丁目二

160

大瀧潤家医学士を訪ひて来診を求む明日午後を約して夕帰宅

統一容林依然、時々呼吸切迫の徴あり

女中よしも風邪にてねたり起きたりす、

(2行空白)

十二月廿二日

国民新聞三今晚十二時半青山原宿二〇三三出火ありしを報す直二

三村君宅の安否を気付ひて見舞ふ隣家なりしか幸に類焼を

免かる、いろく雑話座三生田和蘭屋主人あり長座して午食

の饗二預り午後一時半帰宅 四時大瀧医学士来診

予チフテリアの微なき嗽といふに無し普通の気管支加答見」 161

なり病は既に峠を越せりといふて帰へる、一ト先安心す

朝夕二回女医学校より依田女史来り咽喉に薬を塗布す、時々吸入、

(1行空白)

十二月廿三日

午前、

(7行空白)

162

(以下白紙)

(大正三年分了)

最後に本稿は科学研究費挑戦的萌芽研究(課題番号24652049)の資金援助によるものであることを附記する。

なお、二〇一三年十月十五日より十一月三十日まで「新耽奇会展」奇想天外コレクション」が早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に於いて開催された。貴重な展観であった。

* * *

林若樹・三村竹清などを軸にした集古会と古典継承(とくに日本中世の刊写本・中国宋版など)の係わりについてぼつ／＼考えてきたが、その一端を「中世文学」「美術」史用語の生成と内国勸業博覧会―奈良絵本をめぐって―と題して発表した(要旨は、『大正イマジユリ』9号(近刊)掲載予定)。京阪と集古会人脈を結ぶ水落露石・山内神斧の果たした役割の重さに触れることができなかったが、古くは山内神斧「大津絵展覧会の思出」(『工藝』120号(1951・1)、近くは丹尾安典「山内神斧のこと―石井桃子君の追跡―」(『一寸』2号(2000・5))などにかがいが知られる。露石を視野に、京阪の保古会などの動きを考えるべきであることは明らかである。露石の貼込帖に「黙語会」関連の報条数点が貼られていることと併せて興味は尽きない。全て今後の課題である。